

京大 広報

KYOTO UNIVERSITY



※ P5932 参照



※ P5938 参照



※ P5933 参照

2024.3
No. 773

目次

[大学の動き]

- 京都大学ここのえ会主催 第2回講演会を開催 5932
- 情報環境機構データ運用支援基盤センターを設置 5933
- 2023年度京都大学高大連携事業 学びコーディネーターによる授業を実施 5934

[部局の動き]

- NHK 大学セミナー「ねほりんぱほりん出前授業 (養子)」in 京都大学を開催 5936
- 京都大学国際シンポジウム2023「アジアにおける地球環境学の教育・研究-農村文化とその保存が有する『人新世』における地球環境学での意義」を開催 5936
- 盛山正仁 文部科学大臣が、防災研究所附属火山活動研究センター(桜島火山観測所)を視察 5938

[寸言]

- 価値多層社会へ 澤田 純 5940

[随想]

- 魚釣りについて思うこと
名誉教授 山下 洋 5941

[洛書]

- 動物の行動の「なぜ」を探す 木下 こづえ 5942

[栄誉]

- 入江 慶 数理解析研究所准教授および大宮寛久 化学研究所教授が、第20回(令和5年度)日本学士院学術奨励賞を受賞 5943

[話題]

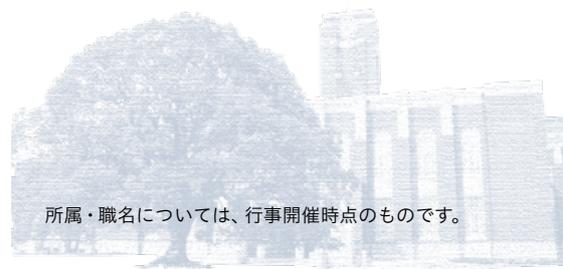
- 本学卒業生の万城目学さんが、第170回直木賞を受賞 5944
- 令和5年度広報連絡会を開催 5944
- 施設部施設企画課におけるフリーアドレス化を通じた働き方改革への挑戦 5947

[訃報]

- 沖野 教郎 名誉教授 5949



京都大学



所属・職名については、行事開催時点のものです。

大学の
動き

京都大学ここのえ会主催 第2回講演会を開催

「京都大学ここのえ会」（ここのえ会）は、本学出身の女性が学部や研究科の枠を超えて交流しながら、本学の男女共同参画推進事業や女子学生、女性研究者などへの緩やかな支援を行う同窓会として2021年11月に設立されました。

このたび、同会の主催による第2回講演会を1月27日（土）に京都にて開催しました。本講演会はここのえ会を広く知ってもらいイベントとして、男女共同参画に興味のある本学関係者であれば男女を問わず受け付け、現地参加者42名、オンライン参加者37名が参加しました。

冒頭、浅山理恵 ここのえ会長（SMBCオペレーションサービス株式会社副社長）から挨拶があり、ここのえ会の説明や、登壇者や来場者への謝辞が述べられました。

その後、仲井嘉浩 積水ハウス株式会社代表取締役 社長執行役員 兼 CEOから「積水ハウスのダイバーシティ&インクルージョンについて」と題した講演が行われました。講演では、積水ハウスにおけるこれまでのキャリア支援や女性職員の活躍推進に向けた取り組み、男性育休制度を通じた社会意識の変革の必要性など、男女共同参画の先端を走る積水ハウスの現状や展望が紹介されました。

続いて行われたパネルディスカッションでは、仲井社長に加え、パネリストとして飯島奈絵 堂

島法律事務所パートナー弁護士および加藤博章 薬学研究科教授を迎え、ここのえ会副会長である野崎治子 理事がモデレーターを務めました。冒頭には飯島弁護士から弁護士会の男女共同参画の実情、加藤教授から薬学研究科の男女共同参画の実情が紹介され、その後は会場から質問が寄せられ、それぞれのパネリストの立場から回答が述べられました。

講演会後は、学童保育所京都大学キッズコミュニティ（KuSuKu）の見学および懇親会が実施されました。見学では、同所が提供しているプログラムの紹介や児童が実際にどのように過ごしているかを見ることができ、懇親会では、会員・非会員問わず盛んに交流がなされ、ここのえ会やこれからの本学の男女共同参画に向けた期待を語り合いました。



挨拶する浅山会長



講演する仲井社長



パネルディスカッション



懇親会の様子

大学の
動き

参加者からは、「女性活躍推進事例について有意義な情報を得て、感謝いたします」といった声や、今後も同種企画を望む声などが寄せられました。



集合写真

(渉外部 (渉外課))

[目次に戻る ↗](#)

情報環境機構データ運用支援基盤センターを設置

情報環境機構は、1月1日付で、従来からのサービス部門をIT基盤センターに改組するとともに、研究のライフサイクルに応じた研究データの管理・運営からデータ駆動による新たな価値創造まで、全学的な研究データ基盤のプラットフォームを構築するため、分野横断型のデータ



開所式の様子

公開・利用を促進するコアインフラ担当組織として新たにデータ運用支援基盤センターを設置しました。

1月9日(火)に学術情報メディアセンター北館大会議室にて執り行われた開所式では、引原隆士 情報基盤担当理事・情報環境機構長が「研究のDXに資する組織として定着するよう、皆さんに支援していただきたい」と、センターの重要性について述べ、新センターの業務を担う教職員を激励しました。

【データ運用支援基盤センターの業務】

- ・データ運用のための環境整備とシステム構築
- ・データ駆動型研究に対応する計算機資源の整備と全学利用体制の確立
- ・情報にかかわる知識・技能の習得支援

(情報部 (情報推進課))

[目次に戻る ↗](#)

2023年度京都大学高大連携事業 学びコーディネーターによる授業を実施

高大接続・入試センターでは、高大連携事業の一環として、全国の高等学校を対象に学びコーディネーター事業を実施しています。本事業は、高等学校における探究活動やキャリア形成の支援、大学院生などへの教育機会の提供を目的として、大学院生（博士後期課程）およびポストドクターを学びコーディネーターとして募り、全国の高校生を対象に研究紹介の授業を行うものです。

今年度は68名の大学院生などによる協力のもと、10月4日(水)～12月22日(金)の期間中、出前(対面)授業およびメディア(Zoomによる)授業を全国52校において実施し、延べ約5,700名の高校生が受講しました。

受講した高校生からは、「答えが見つからない問いを研究し続ける奥深さを知り、感動した。高校生である今から、さまざまな事象に目を向け、自分の興味や疑問を大切にしていきたい」「授業を通じて学んだ研究のプロセスや発表の仕方を、探究活動に活かしたい」「大学院生がとても楽しそうに研究について話をされていたので、自分も好きなことを追究してみたいと感じた」



授業の様子 1



授業の様子 2



授業の様子 3



授業の様子 4



授業の様子 5



授業の様子 6

大学の
動き

「大学でどのような研究をしたいか考えながら、日頃の勉強に取り組もうと思った」といった感想が寄せられました。

授業を担当した大学院生などからは、「授業を準備する過程で、専門的な研究内容を高校生にも分かりやすく、かつ本質的なアイデアを損なわずに説明する力が身についた」「自身の研究が社会の中でどのような位置づけにあり、社会に還元するためにどのような工夫が必要であるかを考える契機になった。また、高等学校の先生方のような教育に携わる方々との交流が、研究と社会をつなげる一端になると実感した」「今後はより広く社会に自身の活動を説明できるよう、研究に向き合っていきたい」といった声が聞かれました。

高大接続・入試センターでは、今後も全国の高校生に向けてさまざまな高大連携事業を展開していく予定です。

【関連リンク】

高大接続・入試センター

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/admissions/koudai/kuac>

(教育推進・学生支援部(入試企画課))

[目次に戻る ↗](#)



NHK 大学セミナー「ねほりんぱほりん出前授業（養子）」 in 京都大学を開催

2023年12月14日(木)にNHKと文学部・文学研究科の共催で、NHK大学セミナー「ねほりんぱほりん出前授業(養子)」in 京都大学を開催しました。

今回のセミナーでは、NHK番組『ねほりんぱほりん』の養子の回を取り上げ、番組ディレクターの山登宏史氏を講師としてお招きし、番組制作の裏側などをお話いただきました。会場には、番組のファンやメディアに関心のある学生が約120名参加し、熱心に聴講している様子が印象的でした。

セミナー後のNHK職員による仕事紹介では、番組ディレクターをはじめ、アナウンサーやキャスター、人事担当者などさまざまな職種の方からの話を伺う時間が設けられ、約45名の学生が参加しました。質疑応答の時間には多くの質問が上がり、メディア関連の仕事への関心の高さが見られました。



セミナーの様子

(大学院文学研究科)

[目次に戻る ↗](#)

京都大学国際シンポジウム2023「アジアにおける地球環境学の教育・研究－農村文化とその保存が有する『人新世』における地球環境学での意義」を開催

2023年12月11日(月)に、京都大学国際シンポジウム2023「アジアにおける地球環境学の教育・研究－農村文化とその保存が有する『人新世』における地球環境学での意義 (Kyoto University International Symposium 2023 on Education and Research in Global Environmental Studies in Asia, Rural Culture and Conservation – Implications for Global Environmental Studies in the Anthropocene)」を、ベトナムのフエにあるフエ農林大学を主会場にハイブリッドで開催しました。コロナ禍の影響下にあった2020年以降、初めての海外での開催となりました。アジア諸国を中心に13カ国52組織から研究者や学生、民間企業関係者など、合計301名が参加しました。

部局の
動き

シンポジウムは、湊 長博 総長、勝見 武 地球環境学学長、Do Thi Xuan Dung フェ大学副学長、Tran Thanh Duc フェ農林大学学長による開催の辞から始まり（一部オンライン）、この後、Le Van An フェ農林大学前学長による基調講演が行われました。地球環境学学長と共同で進めてきた少数民族の伝統的な建築技術を生かしたコミュニティハウスの建築プロジェクトを例に、農村文化の保存・継承についてお話しいただきました。その後、藤井滋穂 名誉教授に、フェ大学の名誉教授の称号が授与され、その記念スピーチが行われました。関連大学関係者や教え子から花束の贈呈があり、会場は温かい雰囲気になりました。



湊総長の開会挨拶
Opening address by President Nagahiro Minato



Tran Thanh Duc フェ農林大学学長からの歓迎の辞
Welcome message from Rector Tran Thanh Duc of Hue University of Agriculture and Forestry



Le Van An フェ農林大学前学長による基調講演
Keynote speech by former Rector Le Van An of Hue University of Agriculture and Forestry



Do Thi Xuan Dung フェ大学副学長から藤井京都大学名誉教授へのフェ大学名誉教授の称号授与
Professor Emeritus Shigeho Fujii was awarded the title of Honorary Professor of Hue University.



現地参加者集合写真 Group photo of on-site participants

部局の
動き



口頭発表の様子 1
Presentation in an oral session.



口頭発表の様子 2
Discussion in an oral session.

午後は、まず若手研究者と学生によるポスター発表（3分野:①Environmental Technology (2セッション)、②Natural Resources (2セッション)、③Global Ecology)の質疑応答セッション（計5セッション）でさまざまな討論がなされました。次に同じく3分野に分かれ、優れた成果を挙げる若手研究者を招へいた研究発表セッションを実施し、最新の研究成果を基点に活発な議論が交わされました。最後に、選考委員会によって選出されたベストポスター賞の表彰式（シンポジウム実行委員長：西前 出 地球環境学堂教授）、宇佐美 誠 地球環境学堂副学堂長による閉会の辞が述べられ、本シンポジウムは閉幕しました。現地参加者にとっては、ティーブレークなどでも旧交を温めたり、新しいつながりが生まれたり対面開催の良さも実感できるシンポジウムとなりました。

（大学院地球環境学堂）

[目次に戻る ↗](#)

盛山正仁 文部科学大臣が、防災研究所附属火山活動研究センター（桜島火山観測所）を視察

盛山正仁 文部科学大臣は、1月10日（水）に、防災研究所附属火山活動研究センター（桜島火山観測所）を視察されました。

同センターは、日本で最も活動的な火山である桜島を全国的レベルの野外観測拠点として、学際的な実験・観測を総合的に推進しています。

盛山大臣は、井口正人 防災研究所附属火山活動研究センター長の案内により、高免（こうめん）観測坑道（2016年完成）を視察されました。現場では井口センター長による水管傾斜計



高免観測坑道にて井口センター長の説明を受ける盛山大臣 1



高免観測坑道にて井口センター長の説明を受ける盛山大臣 2

部局の
動き



火山活動研究センターの概要説明を聞く盛山大臣



桜島をバックに盛山大臣と井口センター長の記念撮影

および伸縮計の解説に聞き入り、観測データの収集や火山研究について熱心に質問されました。

その後、桜島火山観測所を訪れ、同センターの概要や火山活動観測について意見交換を行い、観測所内に設置されている目に見えない噴煙を検知するレーダーやデータ収録システムなどを視察されました。

(宇治地区事務部)

[目次に戻る ↗](#)

価値多層社会へ

澤田 純



1974年 京都大学工学部土木工学科へ入学し、そこで教えられたのがトレードオフという二元論の考え方であった。橋を作るのかトンネルにするのか、条件に応じ最適化したコストで作る、まさにトレードオフの世界であった。一方、世の中はトレードオフだけで成り立つほど単純でない。さまざまな構造の中から多様な関係者の同意を取りつけるコンセンサスが必要だと気づいた。

社会人となりアメリカ赴任の折に再び二元論の限界を実感した。異なる言葉や文化を持つ者同士がAかBかで決めるのではなかなかうまくいかない。両者を同時に実現する第三の道を選ぶことが肝要である。そのような経験を経て、社長就任時の最初のビジョンとして「公共性と企業性を両立せよ」という点を示した。公共性が企業性か、二項対立ではなく、中庸でもなく、両方を同時両立せよと言い続けてきた。それを実現するためのヒントが、西田幾多郎の絶対矛盾的自己同一という考えに代表される哲学にあるのではないかと、この思いに至る。

一方、シーズの世界に目を向けると2019年 英学術誌「Nature Photonics」に掲載された、半導体を光化する光電融合技術がNTT研究所から生まれてきた。この光半導体を活用することで、エネルギー消費の問題を解決でき、自社の技術でゲームを変えていけると考えた。この技術がIOWN構想を世に出すきっかけとなった。そうすると、どのような社会が来るのか。その答えを求めて2019年夏、京都大学文学部の出口教授を訪ね、この新しい情報通信基盤について議論した折に「新しい社会インフラには新しい哲学が必要」との示唆を受けた。2023年7月、京都大学とNTTで京都哲学研究所を設立し、経済や技術一辺倒ではない価値多層社会の実現に向けて新しい哲学思想の構築を目指している。

その鍵が「Self-as-We (我々としての自己)」である。「私」が集まり「我々 (We)」ができるのではなく、「我々」があって「私」があるという相互依存をもとにする考え方である。「我々」には人間はもちろん、モノやテクノロジーなども含まれる。これからの社会には「自助/自立」をベースとした「利他」が求められている。

昔から、京都大学は学問領域に制約を設けず、既存領域から離れて新しい領域を生みだしてきた「自由の学風」が大きな特徴である。既成の思考様式から自由になるとは別の様式・形式を自ら用意することであり、つまり自立していなければならない。その意味で、京都大学はまさに「自由の背景にある自立」ということを体現してきたと言える。今後も、本学の学生および教職員のみなさんのご活躍により日本の社会的課題の解決を進め、自立した日本の実現および世界への貢献を果たすことを祈念している。

(さわだ じゅん、日本電信電話株式会社代表取締役会長、昭和53年工学部卒業)

[目次に戻る ↗](#)

随想

魚釣りについて思うこと

名誉教授 山下 洋



私の専門は沿岸魚類の生態学です。ご多分にもれず子供の頃から魚釣りが好きで、魚を研究して人生を過ごしたいと考えていました。自分の好きなことで給料がもらえていいわねと、妻からは40年以上言われ続けています。

大学を出た後は東北地方にある国の研究所で研究員を務め、当時は海だけでなくヤマメやイワナを狙って溪流にもよく出かけました。2002年に京都大学から声をかけて頂きましたが、それからは大学のあまりの忙しさに釣りをする余裕がなくなっていました。定年が近くなった頃に、海産魚であるスズキがなぜ川に回遊するのかという研究を始めました。実際に、河口から数十kmも離れた溪流のような淡水域に、60cmを超えるスズキが生息しているのです。そこで、川スズキの調査に取りかかろうとしたところ、川でスズキを獲る漁師が日本からほぼ消滅していることがわかりました。標本採集のためには、自分で釣るしか方法がありません。ところが幸いなことに、このプロジェクトには大学の釣りサークル出身者などセミプロ級の釣り師が集まり、私も彼らに師事しつつ調査を進めることができました。中にはフライ(毛針)で巨大なスズキを釣る猛者もいて、釣り具と技術の進歩に目を見張りました。スズキ釣りはなかなか大変な作業です。数ヶ月にわたり夕方から深夜まで川岸でひたすらルアーを投げ続ける、まるで禅の修業のような毎日でした。苦勞の甲斐あって十分な量の標本を集めることができ、共同研究者の皆さんが大変優れた論文をまとめつつあります。この調査をきっかけに私も釣りを再開し、最近ではフライフィッシングからオフショアジギングまでいろいろな釣りを楽しんでいます。

研究者として日本の沿岸魚類資源の長期的な減少に心を痛めてきましたが、再び釣りを始めて、この数十年の間に川や沿岸の魚が本当に減ってしまったことを実感しました。原因の一つとして、日本での遊漁管理の無策があります。日本の釣り人口は約490万人と言われていますが、一部の管理された河川以外では、釣りにはほとんどルールがない状態です。490万人の釣り人がどれくらい魚を釣って、水産資源に与える影響がどの程度なのか、データは全くありません。他の先進国ではライセンス制度が整備されている地域も多く、ライセンス購入時に分厚い遊漁規定集をわたされて、それを読むだけでも資源管理の重要性を理解できます。アメリカでは遊漁の経済規模は漁業の十倍とされており、州によってはライセンス収入だけで数十億円にのぼり、それを原資に資源の研究と管理が行われています。日本でも、魚がもっと釣れるのであれば釣り人は少しくらいのお金は喜んで払うのではないだろうか、1人1000円のライセンス料があれば年間50億円を環境修復や資源の再生に使えるではないか、釣りという遊びを通して子供達に自然環境を教えられないか、遊漁を地域の基幹産業にして過疎地の活性化を図れないか、ルアーを投げながら妄想が膨らむこの頃です。

(やました よう、令和2年退職、元フィールド科学教育研究センター教授、
専門は沿岸資源生物の生態学、森里海連環学)

[目次に戻る ↗](#)

洛書

動物の行動の「なぜ」を探す

木下 こづえ



近年、日本では犬と猫の飼育数（2023年10月現在1,591.3万頭、全国犬猫飼育実態調査）が、15歳未満のこどもの数（2023年4月現在1,435万人、総務省）を上回っている。これほどたくさんの犬猫が人と暮らしているのであれば、彼らの行動の理解はより深まっているに違いない!と思うが、身近な動物であっても謎に包まれた行動がたくさんある。例えば、猫は完全肉食動物であり、草を消化できないにもかかわらず、草を食べる。この行動は未だミステリーであるにもかかわらず、なぜか猫に給餌する用の「草」が市販されている。「草を食べると毛繕いで飲み込んだ毛玉を吐き出すことができる」というような俗説が出回っているためである。また、猫は鳥を見ると「ニヤニヤニヤ」や「ニャツニャツ」など多様な鳴き声を出す。本来、猫は鳥を獲物として捕らえる時、姿を隠して忍び寄って狩る。また、猫は単独で狩りをするため、獲物の存在を音で誰かに知らせる必要もない。鳴く行動にどのような意味があるのか、これも謎である。このように、動物たちにはわかっていないことがたくさんあるが、人は動物について『わかった気になっている』例が多々ある。児童書でも動物のトリビア本が多く出版されているが「なぜそのような行動をするのか」については説明があまりない。犬猫とよりよい生活を送るためには、彼らの行動を理解することが重要である。それと同じように、同じ地球にらす野生動物についても理解を深めることが求められている。近年、気候変動や人為的影響により、絶滅の危機に瀕する種や、クマのように人の生活圏に現れることで害獣として駆除される種が増えている。日本では、オオカミが絶滅したことでシカが増えたと考えられているが、シカの増加により森林環境が変化し、土砂災害や農作物被害などの問題が年々深刻化している。野生動物と共存するためには、犬猫と同じように、まずはその動物について正しく理解することが重要である。しかし、野生動物を研究する研究者は少なく、研究者の方が『絶滅危惧種あるいは絶滅寸前種』になりつつある。フィールドワークにより、多種多様な野生動物研究者を育成してきた京都大学は、世界的にみても稀有な存在であり、人と自然との共生が求められる社会において重要な役割を担っている。

私の大好きな歌に「目にうつる全てのことはメッセージ」（荒井由実「やさしさに包まれたなら」）という歌詞がある。フィールドワークは、まさに自分の目にうつるものからメッセージを受け取り、科学として普遍的な情報を紐解く研究方法である。野生動物研究者として、言葉を話せない動物の行動を理解するためには、まさに自身の目にうつるデータから「なぜ」を見つけ、メッセージ（情報）を紐解いていかなければいけない。動物の行動から浮かび上がる「なぜ」をたくさん見つけ、その行動の意味を明らかにすることで、人と動物のよりよい共存・共生に貢献していきたい。

（きのした こづえ、アジア・アフリカ地域研究科准教授、
専門は保全・繁殖生理学、動物行動学）

[目次に戻る ↗](#)

栄誉

入江 慶 数理解析研究所准教授および大宮寛久 化学研究所教授が、第20回（令和5年度）日本学士院学術奨励賞を受賞

このたび、入江 慶 数理解析研究所准教授および大宮寛久 化学研究所教授が、第20回（令和5年度）日本学士院学術奨励賞を受賞いたしました。同賞は、優れた研究成果をあげ、今後の活躍が特に期待される若手研究者に対して与えられるもので、日本学術振興会賞を受賞した研究者の中から6名以内が選ばれます。

以下、両氏の略歴および受賞題目を紹介します。

■入江 慶 数理解析研究所准教授

入江准教授は、2009（平成21）年東京大学理学部を卒業、2011（平成23）年京都大学大学院理学研究科修士課程を修了し、2012（平成24）年同大学大学院理学研究科にて博士（理学）を取得しました。京都大学数理解析研究所助教、東京大学大学院数理科学研究科准教授を経て、2021（令和3）年京都大学数理解析研究所准教授に採用され、現在に至っています。

今回の受賞題目は「接触幾何学、シンプレクティック幾何学とストリングトポロジーの研究」です。



■大宮寛久 化学研究所教授

大宮教授は、2002（平成14）年京都薬科大学薬学部を卒業、2004（平成16）年同大学大学院薬学研究科修士課程を修了し、2007（平成19）年京都大学大学院工学研究科にて博士（工学）を取得しました。その後、京都大学大学院工学研究科博士研究員、北海道大学大学院理学研究科助教、北海道大学大学院理学研究科准教授、金沢大学医薬保健研究域薬学系教授を経て、2022（令和4）年京都大学化学研究所教授に採用され、現在に至っています。

今回の受賞題目は「一電子移動を誘起する有機触媒の開発とラジカル的共有結合形成反応の精密制御」です。



【関連リンク】

日本学士院学術奨励賞の受賞者決定について | 日本学士院

<https://www.japan-acad.go.jp/japanese/news/2024/011201.html>

大宮寛久 教授が第20回（令和5年度）日本学士院学術奨励賞 受賞者に決定しました - 京都大学 化学研究所

https://www.kuicr.kyoto-u.ac.jp/sites/news/award_20240115/

（渉外部（広報課））

[目次に戻る ↗](#)

話題

本学卒業生の万城目 学さんが第170回直木賞を受賞

1月17日(水)に直木賞の選考委員会が開かれ、万城目 学さんの『八月の御所グラウンド』が選ばれました。

万城目さんは、法学部を卒業後、2006年に『鴨川ホルモー』でデビューし、『鹿男あをによし』や『プリンセス・トヨトミ』など、日常にファンタジーを織り込んだ小説を発表してきました。これまでに多くの作品が映画化されています。

万城目さんの今後のさらなる活躍が期待されます。

湊 長博 総長のコメント

京都大学を代表して、心からお祝い申し上げます。

万城目さんは、2006年にデビュー作の『鴨川ホルモー』で第4回ボイルドエッグズ新人賞を受賞されて以来、「万城目ワールド」と呼ばれるように、日常の中に非日常的空想を組み込んだファンタジーの世界を繰り広げ、多くの読者を魅了してこられました。特に今回の受賞作『8月の御所グラウンド』は、ホルモーシリーズから16年ぶりに、万城目さんが大学生時代を過ごされた京都の地を舞台にした傑作だと思います。

万城目さんには、2023年の京都大学ホームカミングデーで来学いただき、ユーモアに富んだご講演をいただきましたが、本学卒業後いったん企業へ就職されてからも小説家への夢を捨てず自分の道を切り拓いてこられた姿に、学生たちも大いに勇気づけられました。

万城目さんのますますのご活躍を期待しております。誠におめでとうございます。

【関連リンク】

直木三十五賞 | 公益財団法人日本文学振興会

<https://bungakushinko.or.jp/award/naoki/index.html>

第18回京都大学ホームカミングデーを開催しました

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/news/2023-12-21>

(渉外部(広報課))

[目次に戻る ↗](#)

令和5年度広報連絡会を開催

広報課ではこれまで、毎年1回、広報担当者向けに講習会を開催してきたほか、隔年で広報倫理講習会を開催してきました。しかしながら、昨年度、野崎治子 広報担当理事と広報課職員が各部局を訪問した際に、広報担当者が手探りで広報業務を行っている現状や不安に感じていることなどを伺いました。このことを受け、今年度は「広報担当者の専門性を高めること、そして、広報担当者同士の横のつながりや連携を強化すること」を主な目的に、1年間で計5回の広報連絡会を開催し、のべ437名が参加しました。

第1回は、例年通り、広報を初めて担当する職員向けの業務講習会を行いました。参加者からは、広報センターや素材集「KyotoU Stock」を活用したいという声が多数寄せられ、実際に利用件数が増加しました。

話題

第2回と第3回では、部局からの要望やアンケートで、他部局の取り組み事例を知りたいという声が多数あったことを受けて、部局長を講師に招き、それぞれの部局の広報事例や広報課に期待することについて講演していただきました。参加者からは、「これこそ広報だと思いました!」、「作成の過程やスケジュールなど詳しくご教示いただけて、どれくらいの人的、金銭的成本を見積もればよいか、また、閲覧の解析の仕方等も、非常に参考になった」、「連絡会を続けていくことで、全体として大学の広報が高度化、活性化されていくことを期待しております」という感想が寄せられました。また、第3回の後には他大学の公式グッズからお菓子などを取り寄せて意見交換会を開催し、広報担当者同士の横のつながりの強化を図りました。

また、第4回では、法務室の弁護士から著作権や肖像権について身近な事例を交えた講習を行っていただきました。参加者からは、「事例をもとに説明いただけだったので、自身の業務に照らし合わせてわかりやすかった」という感想が寄せられ、アンケートでは94%の方から「大変有意義だった」「有意義だった」との回答がありました。

第5回は、広報課と学術研究展開センター(KURA)との共催により開催しました。「広報とは」というテーマで、研究を発展させるための広報活動についてKURAから講習を行っていただきました。「研究広報について学べる機会があまりなかったので、わかりやすくまとめてくださって大変助かりました」との感想が寄せられました。

広報課では、各部局の広報担当者とのつながりを強化し、本学の広報活動の活性化を図るため、令和6年度も広報連絡会を開催する予定です。広報担当の教職員のみならず、広報活動に少しでも興味・関心がある方は是非ご参加ください。

なお、今年度の各回の内容は以下の通りです。

第1回

開催日時：6月27日(火) 13時30分～14時30分(オンライン開催)

内 容：広報実務講習

講 師：広報課(広報企画掛、情報発信掛)

参加者数：183名

参 考：KyotoU stock(学内限定公開)

<https://sites.google.com/kyoto-u.ac.jp/kyotoustock/home>

第2回

開催日時：9月21日(木) 14時～15時30分(ハイブリッド開催)

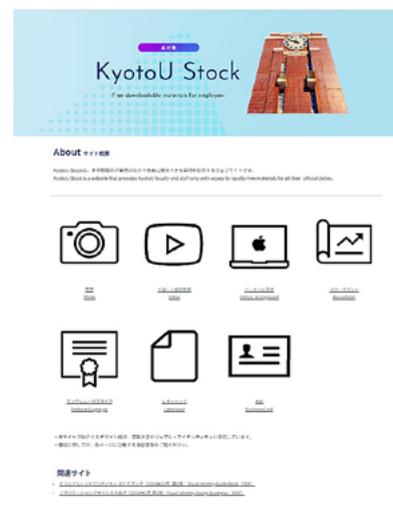
内 容：医生物学研究所の動画制作紹介

動画ポータルサイト「KyotoU Channel」紹介

講 師：医生物学研究所 河本 宏 所長および澄田裕美 特定助教

広報課(コンテンツ企画・支援室)

参加者数：108名



第1回広報連絡会で紹介した素材集「KyotoU Stock」

話題

参 考：医生研チャンネル

<https://www.youtube.com/channel/UCQBisvT4JPt5rdgMWpSVSsqg>
裏医生研チャンネル

<https://www.youtube.com/@ura-iseiken>
KyotoU Channel

<https://www.channel.pr.kyoto-u.ac.jp/>

第3回

開催日時：12月21日（木）（対面開催）

第1部：15時～16時30分、第2部：16時40分～18時

内 容：第1部：人間・環境学研究科および防災研究所の広報活動紹介

第2部：意見交換会

講 師：人間・環境学研究科 浅野耕太 研究科長

防災研究所 中北英一 所長

参加者数：25名

第4回

開催日時：1月29日（月） 14時～15時（オンライン開催）

内 容：広報倫理講習（著作権、肖像権）

講 師：法務室

参加者数：82名

第5回

開催日時：3月6日（水） 13時30分～15時（対面開催）

内 容：KURAによる広報講習

講 師：KURA 白井哲哉 副部門長・部門長代理

参加者数：39名



第2回広報連絡会で講演する河本所長および澄田特定助教



第5回広報連絡会の講演の様子

（渉外部（広報課））

[目次に戻る ↗](#)

話題

施設部施設企画課におけるフリーアドレス化を通じた働き方改革への挑戦

施設部施設企画課（内の4掛事務職員4名、技術職員8名）が、2023年12月より、本部棟3階オフィスのフリーアドレス化を試験的に開始しました。掛同士の連携強化やコミュニケーションの活発化を通じて、業務効率化や新しい発想が生まれることを目指しています。この試験的な取り組みでは、「トライ&エラー」方式を採用し、はじめから大きな変化を行うのではなく、生じた課題をその都度課内で検証するなど、時間をかけ段階的に進める方針をとりました。オフィスの座席のレイアウトや運用ルールを検討、什器の移動に至るまで、すべて職員自身で力を合わせ行いました。また、抜本的な働き方改革に向けて、電子決裁や打ち合わせにデジタルツールを取り入れるなどDX化にも取り組んでいます。

現段階で以下の内容を実施いたしました。

- ①ペーパーレス化による、課内と各個人の収納スペースの縮小
古くなったデスクトップPCをノートPCに変更
- ②民間企業のオフィスを参考に、Activity Based Working（アクティビティ・ベースド・ワーキング）の考えに基づいたレイアウト変更
- ③収納スペースの縮小による、新たな共有スペース（ミーティングデスク・コンセントレーションブース・チャットングスペース）の創出

取り組みを進めるなかで新しい課題も見つかりました。特に大きな問題としては、電話、新しい機器のトラブルシューティングなどが挙げられます。予算の都合ですぐに解決できないことはあるものの、課題を整理することで少しずつ変えていきたいと考えています。



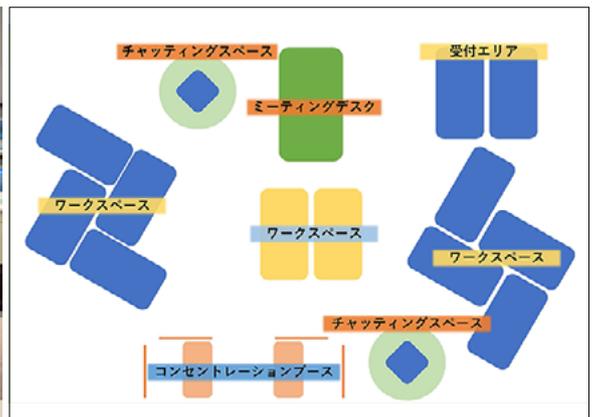
以前のオフィスの様子



現在のオフィスの様子



什器を移動している様子



レイアウト図



また、この取り組みを通じて得た知見や課題を全学へ発信することで、働き方改革に向けたオフィスづくりを後押ししてまいります。

(施設部(施設企画課))

[目次に戻る ↗](#)

訃報

このたび、沖野教郎 名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。
以下に同氏の略歴、業績等を紹介いたします。

沖野 教郎 名誉教授

沖野教郎先生は、令和5年12月9日逝去されました。享年90。

先生は、昭和31年3月徳島大学工学部機械工学科を卒業、昭和33年3月京都大学大学院工学研究科修士課程を修了され、昭和36年3月同研究科博士課程を修了されました。同年4月京都大学工学部精密工学科助手に採用され、昭和38年助教授に昇任、昭和42年4月北海道大学工学部精密工学科助教授に転任、昭和43年4月に教授に昇任、昭和62年5月より京都大学工学研究科教授に転任され、新設の応用システム科学専攻の応用人工知能論講座を担当されました。この間本学において、教務事務電算管理運営委員や高度化調査研究会委員、統合情報通信システム建設推進委員など各種の委員を務められました。平成9年停年により退官、京都大学名誉教授および北海道大学名誉教授の称号を授与されました。本学退官後は、平成9年4月から滋賀県立大学工学部機械システム工学科教授に就任、平成16年には滋賀県立大学名誉教授の称号も受けられました。



先生の研究は京都大学精密工学科在任の初期には転がり摩擦など軸受関連の研究からスタートされましたが、昭和42年の北海道大学への転任以後は、コンピュータ援用設計・生産システムの研究に一貫して注力され、機械要素と設計の自動化の研究を強く推進されました。中でもTIPS-1という設計ソフトウェアの開発は、それまでの2次元の図面での表現とはまったく異なり、3次元立体構造を形状基本要素の集合として直接扱うことのできる画期的なもので、CAD/CAM (Computer Aided Design/Manufacturing) システムとして具体化された世界最初のシステムでありました。多くの大学・企業にて採用されこの分野の発展に大きく貢献したものであり、自動設計の分野に大きな進展をもたらしたものとして、世界的に高く評価されています。主な著書として「自動設計の方法論」(養賢堂)、「生物型生産システム」(朝倉書店)があります。

また、精密工学会、TIPS研究会、国際共同研究組織CAM-IのほかIFIP(The International Federation for Information Processing)などにおいて、副会長、会長等の要職を歴任され、学術行政に尽力されました。世界の製造業の設計・生産システムにおけるコンピュータ援用の高度化に貢献した功績に対し精機学会大越記念会記念賞、「自動設計の方法論」に対して精密工学会蓮沼記念賞、また積年の貢献に対し精密工学会賞を受賞されています。またこれら一連の教育研究活動、学界活動により、平成24年4月瑞宝中綬章を受けられました。

これらの顕著な業績からわかるように沖野先生は、計算機援用設計論、生産システム論の専

訃報

門分野において、斯学の進歩発展に大きく貢献され、その影響と思想は今日もさまざまな形で受け継がれています。

(大学院工学研究科)

[目次に戻る ↗](#)